025_6-09

ウイラ・キャザー『ア・ロースト・レイディー』について

永井　衷

(一)

キャザー(W. Cather)を語る文學史家にとつて、そのリージョナリストとしての輝かしい業績をたたえることは今日では一つの常識となつている。事實また女史の作品は二、三の例外を除けば、何等かの意味で「中西部」に關係をもたないものはないと言えるかも知れない。中西部の特殊な風土や住民を描いて、しかもこれを香り高い藝術作品に結晶させることに成功した點では、けだし女史に比肩しうる者はないであろう。

O Pioneers! (1913) に始る女史の小說は *The Song of the Lark* (1914), *My Antonia* (1918) を經て *One of Ours* (1922) へ、そして翌一九二三年には *A Lost Lady* が出ている。これらの作品はいづれも前世紀末、或は今世紀初頭の中西部を背景としているが、とりわけ『おゝ開拓者よ』『私のアントニア』『轉落の貴婦人』は三部作として女史の初期の小說の特色となつている西部フロンティアの問題を取扱つたものとして重要な意味をもつている。卽ちこの連作の中にキャザーは變貌する西部フロンティアの一斷面に明瞭な輪郭をあたえているが、中でも『轉落の貴婦人』は西部フロンティアの消滅とアメリカ產業資本の西部進出と言う背景の中に、特殊な階級に屬する女性の破滅してゆく過程をえがいた點で興味深いものがある。と同時に『私のアントニア』で批評家メンケンに激賞され『吾等の者の

一人』でピュリッツァ賞を授けられて技巧の上でも一層の圓熟を加えて來た頃の作品で、女史の作品を知る上でも重要な一冊であるように思う。

以下大體以上のような立場からキャザーの小説『轉落の貴婦人』を考えてみたいと思う。

(二)

『轉落の貴婦人』は前世紀末のアメリカ中西部地方を背景として繰りひろげられる鐵道貴族とその妻の悲劇的な半生を取扱つた作品である。就中この物語の中心になつているのは妻のマリアンであるが、彼女の夫キャプテン・ダニエル・フォレスターはバーリントン鐵道の建設者であり、西部開發の偉大な野望を實現したいわば先驅的な西部開拓者の一人であつた。そして此の物語が始る頃には西部の成功者として若き日の念願通りにスウィート・ウォーターの丘の上に宏壯な邸宅を構えている。そこえは彼の事業關係の友人の誰彼が訪れて歡談してゆくのであるが、マリアンはこれらの客の心を捉えるに充分な美貌と才智の持主であつた。けれども夫は或日山中で墜落したのが原因となつて、も早事業を繼續してゆくことが出來なくなつてしまつた。物語が始ろうとする時には二人はスウィート・ウォターの邸でわびしい晩年を迎えようとしている。しかし夫より二十五も年若いこの女性は、今は病む夫にとつて決して貞淑な妻ではなかつた。人に勝れて美しい容姿と心情をもちながらも、其の周圍の低俗さの中にまきこまれて遂には自らも亦低劣な世界えと轉落してゆくことになる。

さてキャプテン・ダニエル・フォレスターの友人の一人にフランク・エリンジャーとよぶ六フィートゆたかな獨身男がいた。「彼の全身は非常に發溌としていて衣服の下には何か野性動物の殘忍さをもつたたくましい精氣がある樣に思えた。」[3]と言うこの男はマリアンの愛人であり、物語が始る頃には二人の間には一つの默契が出來ていた間柄だつた。第一部第七章には偶〻フォレスター家を訪れたこの男がマリアンと共に降り積つた雪の中を橇を驅つてクリス

マスのためのシーダーを取りに出かける場面がある。そしてそこには女史としては珍しい強烈なラブ・シーンが描かれるのだが次に引用してみよう。

「あんたの顔をみせてお呉れ、マリアン」

フォレスター夫人は仔馬の蹴上げる雪の飛沫をさけようとしてマフで顔をかくした。そのマフの陰からはすかいに彼の方をみやりながら、いたずらっぽく「こう」と云つた。

彼は彼女の腋の下へ手をさし入れて、橇の中に身をかがめた。「もつと僕の方をよくみなきや駄目だよ。此の間あんたと別れてから隨分長い間逢はなかつたね。」

「そう隨分長い間だつたかもしれないわ。」彼女はつぶやいた。長い間彼の腕の中に抱きしめられて、彼女の眼差から嘲笑的な輝きはそれとしれる程にうすらいだ。「そう、長い間逢はなかつたんだわ。」彼女はかすかにうなづいた。

「あんたときたら、僕が十一日に書いた手紙の返事をよこさないんだから」

「そうだつたかしら。えゝでも兎に角電報には返事をしたわ。」彼の顔が次第に近ずいてきたので彼女は顔をそむけた。「ねえ、貴方つたらほんとに仔馬に氣をつけてなきや私達雪の中へほうり出されてよ。」

「どうなつたつていいさ。そうなつてくれた方がいいんだ。どうして僕の手紙に返事よこさなかつたの。」彼は聲をひそめてこう云つた。

「あーら、思ひ出せないわ。貴方そんなにたんとは手紙よこさないんですもの。」

「そりや、ひどいよ。あんたが僕に戀文を書かせようとしないんだよ。危險だからつてさ。」

「そりや、そうだけど馬鹿氣てるわ。でも、もうあんまり警戒する必要はないのよ。あまり神經質にならないで頂戴。」そう云つて彼女は優しく笑つた。「あたし冬中田舎へ行つて、獨りぼつちで年老いてゆく時、いろんな樂しか

つたことが胸の中に活き返つてくるのは好きだわ。」彼の手の上に自分の手を重ねながらマリアンは云つた。

エリンジャーは口で手袋をもぎとつた。

眼下に曲折する小徑と雲におおわれた低い崖を見渡す彼の眼差の中には何か狼のそれに似たものが宿つていた。

「フランク、あたしの指輪に注意してよ。貴方、あたし怪我するジャないの。」

「それジャ如何していつものように外してをかなかつたの。此のあたりのシーダーは如何。此處で橇を止めようか。」

「此處は駄目よ。一等いいのはずつと奥の丘の脊へ曲る深い谷間にあるわ。」

エリンジャーは身をかわした彼女の顔をちらつとみた。片方の口もとに微笑をうかべた彼の部厚い唇が痙攣した。彼女の聲音がかわり、彼には其の變化がわかつた。二人は曲折した小徑の曲り角を何度も廻りながら無言のまま進んで行つた。

やがて雪の上に夕闇が迫つてくると、折から兎を求めてこの谷間をさまよつていたアドルフと言う少年は、乘りすてられている一臺の橇に出くわす。そして橇のそばには二頭の仔馬が繋がれていた。とつさに茂みの中にとびこんで倒木の蔭に身をかくした彼は、やがて狹谷の方から次第に近づいてくるひそひそ聲をきいた。フオレスター家の客の大男が、片手に水牛の膝かけをもつて現われて來たのである。フオレスター夫人は彼にぴつたり寄りそうて歩いていた。

「・・・二人は橇の所まで來ると男は坐席の上に膝かけを擴げた。そして夫人を抱き上げようとした。けれども彼は彼女を橇の上にあげなかつた。彼は長い間彼女をひしと彼の胸に抱きしめた。・・・・

彼は橇の下の方にあつた手斧をとりに歸つてやがて狹谷の方へ引きかえして行つた。フオレスター夫人は目を閉じて頰をマフに寄せて坐つていた。幽かな充ち足りた微笑が彼女の唇にたゞよつていた。空氣は靜かで碧かつた。ア

ドルフは殆んど彼女の呼吸がきゝとれた。斧を打ちおろす音が狹谷にこだました時、彼は彼女のまぶたが痙攣しやわらかい戰慄が彼女の五體を走つたのが見えた。」

けれどもやがてマリアンの夫が關係していたデンバーの銀行が破産した上に、腦溢血で卒倒を起す不運に見舞われフオレスター家の前途はますます暗いものとなつて來た。それにもかゝわらずマリアンの不倫な生活は依然として續けられるばかりか一層積極的になつてゆくのであつた。銀行破産の報に急據デンバーにかけつけた夫の留守を見計らい。女中に暇をやつてフランク・エリンジャーを招きよせたりするのである。この樣なマリアンに對して、彼女を一般の女性と異つた勝れた女性として彼女に溫い思慕と尊敬をよせていたニイル・ハーバートと言う青年があつた。けれども彼すらも今はもうマリアンのこの樣な痴情の生活を眼の邊りに見せつけられるに及んでは、彼女のもとを去つてゆくの外はなかつた。

「エリンジャーのような男と一緒にいた時、彼女は自分の長所をみんなどうしたと言うのだろう。どこへやつてしまつたのだろう。それを無くしてしまつた以上彼女はどうして自分をとり戻すことが出來たのだろう。そして鍛へた鋼鐵の樣な分別、何人とでもわたり合うことができて而も決してひけをとることのなかつた双の樣な分別を他人に、彼にさへあたへてしまはうとは……。」(5)

マリアンに對する憤懣と同時に悲哀とを胸に祕めて、やがてニイルは建築の勉學のために、ボストンへ去つてゆく。

此の小說の第二部は夏季休暇を迎へたニイルが歸省の車中でアイヴィ・ピータズと言う彼とは顏見知りの青年と邂逅するところから始つている。しかもこのアイヴィ・ピーダズこそはかつてニイルが少年の頃、'Poison Peters' の惡名高かつた殘忍な不良少年の後身である。性來の犬嫌いから他家の飼犬を毒殺して人々から蛇蝎の樣に嫌はれた彼が、今では辯護士を開業して辣腕を振う時代となつたのである。而も二年間の彼の不在中にスウィート・ウオーターは一變して、宏大なフオレスター家の土地は今やアイヴィ・ピータズ如き無賴の徒輩の意のまゝになつているのであ

つた。其の上彼から傳え聞くフォレスター夫妻の近況は一層彼の心をいらだゝせるのであつた。

「彼は我々の他の者たちと同樣な身分になつたんだから、毎日シャツを替へる必要はないし以前より幸福さ。土地は半分程になつたよ。充分滿足しているようだね。あれはよく夫の世話をしているよ。俺はいつでもあれにそうするように言つてるんだ。君も知つてるように、以前もそうだつたが樂しみを求めているよ。フレンチブランデーを飲みすぎるよ。しかしあれは夫をほつたらかしにしたりはしないさ。(6)」

アイヴィ・ピータズが喫煙のために立つた後ニィルは車窓の彼方にえんえんとうちつゞくスウィート・ウォーターの流れを眺めつゝ、過ぎ去らうとする一つの時代を次のように嘆くのであつた。「古い西部は夢想家や雄心鬱勃たる冒險家たちによつて開拓がはじめられた。彼らは壯大なまでに世事には疎かつた。彼らには禮儀正しい同胞愛があつたし、攻擊に强くても防禦には弱く、征服してもこれを維持する耐久力がなかつた。彼らによつて勝ち得られた宏大な領域のすべては、今やアイヴィ・ピータズのような手合の意のまゝになる運命にあつた。このような男は、敢爲の氣性に缺け何事につけてものるかそるか思い切つて試してみようとしなかつた。彼らは蜃氣樓を呑みつくし、朝の新鮮さを搔き消そうとし、育ちゆく自由の精神や大地主の屈託のない安樂な生活を根こそぎにしようとするの慨があつた。彼らはまるでマッチ工場が原始林を有利なこつぱにするように開拓者の繩張りや特徵や王侯のような無頓着を破壞し、それを小さく切りきざんでもうけにしかねない勢だつた。この拔目のない若い連中は、金もうけのむつかしい時代になつて零細な經濟にならされて丁度、アイヴィ・ピータズがフォレスターの沼を干した時の仕事と同じようなことを、ミズリーから山岳地帶に至る土地のどこでゝもするのであつた。(7)」

鐵道貴族キャプテン・ダニエル・フォレスターも今では昔日の面影をとゞめないまでに變り果てた廢人となつていた。そしてかつてはフォレスター家の法律顧問であつた彼の叔父も今ではアイヴィ・ピータズに代られ、彼の傍若無人ぶりはマリアン夫人の彼に對する卑屈な言動と共にニィルの心を傷つけるばかりであつた。そしてアイヴィ・ピー

タズの實務の手腕を信ずるマリアンは彼に對して抵抗することをしないばかりか進んで身をまかせようとする。夫を病床に放置してダルツェルといふ別の男と一しよに三週間も家をあけたり、夜中したたか酒をあほつてニイルを訪ねた上エリンジャーを長距離電話で呼び出して棄てられたうらみ言をわめき散らす醜態を演じたりする。しかも夫の死は彼女のこの無軌道な生活を一層ひどいものにするばかりであつた。アイヴィ・ピータズとの交渉はますます頻繁になつて、その邸には俗悪な彼の一派が出入りするようになつて來た。

マリアンとアイヴィピータズのゴシップは路傍の人々のさゝやきの中にまで聞かれるまでになつた。ニイルはマリアンに忠告をあたへるのであるが、夫人の心はも早救いようもないまでにすさみ切つていた。

叔父の病氣の看護のこともあつてニイルはしばらくスウィート・ウォーターに滯在していたのであるが、夏の訪れと共に叔父が回復して再び仕事がはじめられるようになり次第ボストンに歸ろうと思うようになつた。ものみなが疎ましいこの土地から、出來ることなら永久に去りたいと思うようになつた。「人々も土地そのものまでが餘りにも激しく變り果てた。も早歸るべきところはないのだ。彼は「夫人が他の偉大な人々の未亡人のように進んで自らを犧牲にして自分の屬する開拓時代と運命を共にしようとしない」[8]のが何よりも殘念であつた。やがてニイルは夫人に別れも告げずにボストンへと去つて行くのだが、何年かの歳月が流れ去つたその後までやはり彼の胸中を去來するのはマリアン夫人—a long lost lady—への思慕であつた

(三)

斯くして『轉落の貴婦人』は此の作品の前年に出た『吾等の者の一人』の場合と同樣に一種の性格悲劇の文學としての傾向を多分に持つていると言うことが出來よう。しかし同時に內容的には、『おゝ開拓者よ』や『私のアントニア』と一線をなすこの作品のかもし出す「暗さ」の中に西部フロンティアを描いて比類ないこの作家の一つの歷史觀

を織りまぜているのも興味深いものがある。即ちこれらの三つの小説は、時代と場所には多少のずれはあつても、一八八〇―一八九〇年代の變動期の中西部を描いた點では軌を一にしていると考えられるからである。

次にこのような角度からこの小説の特質を考えてみたいと思うのであるが、それによつてリージョナリストとしての女史の輪郭を幾分なりとも描き得たらと思う。それはともかくとして我々はこゝでしばらくアメリカ史の上に目を轉じた方がよさそうである。

一八八〇年から一八九〇年代にかけての時代が現代アメリカ社會の成長發展の基をなした重要な時代であつたことは周知の通りである。いみじくもマークトウェーンによつて、鍍金時代（ギルデッド・エイジ）と命名されたこの時代は一つの變動期であり、中西部地方はフロンティアの問題を含めて一層このことが言えるわけである。一八七〇年年代の合衆國と言えば未だ州としても完全な形を整えていなかつたが、すでにユニオン・パシフィック鐵道はオマハを起點として西に伸びていた。又一方ゼネラル・パシフィック鐵道はサンフランシスコを起點として東に向つて工事を開始してこれら二線はオグデンで連絡していた。我々はこのような鐵道工事の成功者の一人としてキャプテン・ダニエル・フオレスターのあることをみてきたが、しかし同時にこの時代には彼がなつかしげに回顧する夢幻的な西部の平原はそこに群れあそぶ牧牛の姿と共に、その影は次第にうすれようとしていたのである。他方一八六九年にキャリフォーニアに金鑛が發見されて以來ミシシッピー以西の宏大な地域には相次いで地下資源が開發され、これに刺戟された冒險家たちが急速度に西漸運動を開始した。せきを切つてあふれた水がまたゝく間に低地をおおいつくすように西部の豐かな地下資源と肥沃な土地はたちまち彼らの占有下におかれてしまつた。時あたかもヨーロッパからの移民も一八六四年の移民局創設、更にはまた議會に於る契約移民の合法化にともなつて、勞働力の新しい供給者として直接的間接的に西漸運動の人的要素に加わつた。そして一八八〇年代にはこれらの移民のみでも五百萬人を突破したと言われているが、このためにやがて西部開拓線は消滅することになつたのである。

女史の初期の小説はこのように歴史的にも地理的にも浪漫的色彩の濃い中西部に取材されているが、女史がとりわけ深い關心を寄せていたのはこれらの移民、わけても此歐系の移民たちであつたように思われる。彼らのたくましい生活意慾と人生に對する若々しい情熱を愛した女史はアレグザンドラやシャやアントニアの生活の中にそれを美しく結晶させたものと言へよう。ホイットマンが『おゝ開拓者よ』の中でいわゆる開拓者魂を讃美したように、キャザー女史は散文の形で次第に變質して行こうとする古い西部の精神的傳統をこれらのヘロインたちに托そうとしたものゝようである。『おゝ開拓者よ』のヘロイン、アレグザンドラの父ジョン・ベルグソンはスウェーデンから渡來した船大工であつたが、不馴れな仕事に身心を消耗しつくして開拓の業半ばにして世を去つた。後に殘されたアレグザンドラは母や兄弟を助けながら一家の中心となつて働き遂には女地主として成功するのである。

『私のアントニア』も内容は『おゝ開拓者よ』に類似していて、アントニアもやはり北歐系であり父は故國ボヘミアでは織物工であつた。無知な妻の『アメリカ・ビッグカントリー・マッチマネイ』と言うたち難いすゝめに從つて渡米してみるのだが苛酷な異郷での新生活は、やがて彼を自殺へさそう結果となつてしまう。アントニアは町に出て奉公女として働くが健康で素朴なこの田舍娘は思春期の過失として不良車掌のラリー・ドノーバンに誘惑された上すてられてしまう。止むなく歸郷して農耕に從事することゝなるが、すでにその時彼女は身重になつていたのである。けれども普通の女性にとつては耐え難いこの打撃もアントニアの頑健な肉體と强靱な意志をうちまかすことは出來なかつた。人々はやがて何事もなかつたように野良に出て男のようにたくましく荒い百姓仕事に精を出す彼女の姿をみたのだが、出産の日の夕方まで男の外套を着て男の長靴をはいて働いていた彼女はアレグザンドラに通ずる激しい氣性の持主であると言えよう。こう言うアントニアは最後にやはりボヘミアンの男と一しよになつて、明るい子澤山の家庭の主婦となるのだが、『私のアントニア』は獨りアントニアだけではなく、レナと言いタイニ・ソーダボールと言いいづれもアントニアに劣らぬたくましい西部の女性の生活を描いているのは注目に値する。そしてキャザーがこのよ

うな女性たちをどのように深く愛していたかは、同書の中でジム・バードンをして語らしめている通りである。[9] 從つて女史の場合も他のアメリカ作家たちと同様古い西部への一種のノスタルジアを感じていたと言うことが出來よう。けれどもこのような古い西部は、フロンティアの終熄と共に植民當初のそれに比して明確な變質をみせることになる。卽ちフロンティアの消滅は同時にアメリカ經濟の劃期的な飛躍を意味するものであり、やがて新しい企業家たちが强引な資本のストライドを西部の曠野へも押しすゝめてゆく時代が到來する。『轉落の貴婦人』の時代であり、女史が冒頭でこの時代のオマハ・デンバー附近の社會を說明しているのをみれば、此の間の消息を明らかにすることが出來よう。

「當時太平原の諸州には明瞭な二つの社會相があつた。卽ちそれらはそこで生計をたてようとした農地開墾者、手工業者と、大西洋岸から彼らの言い馴らされた表現を用いて言うなら、我が偉大な西部を開拓しようとしてやつて來た銀行家や農園主たちの二つの相から成つていた。[10]」

キャプテン・ダニエル・フォレスターもこのような時代の西部の資本家の一人であつたのだが、氣質的にはむしろアレグザンドラやアントニアに通ずる古い西部の開拓者精神に支えられていたことは、彼の「青年は夢を抱かねばならない」と强調する人生訓[11]と考え合せれば容易にうなづけるところである。其の意味で『轉落の貴婦人』の中で重要な意味をもつのはアイヴィピータズであり、彼こそは時代のチャムピオンであつたと言はねばならない。單純な農業から急速度に近代的な產業形態に移行した西部は必然的に頽廢墮落の樣相を示すのであるが、このような時代に、アイヴィ・ピータズのような拔目のない手合によつて古い西部の傳統が惜しげもなく破壞されて行つたことは前述した引用文にも[12]明らかなところである。

もとよりマリアンと、アレグザンドラやアントニアの間には貴族といわゆる'Peasant'と言ふ階級的相違はあるにしても積極的な生活意慾をもたない夫人がこのような特殊な時代の重壓のもとにあえなく崩れ去つて行つたのはむ

しろ當然と言えよう。この小説の最後の部分で女史はこの時代を説明して次のように述べている。

「ニィルは一つの時代の終りを、開拓者の日没をみたのであり、その榮光がまさに消え去ろうとする時代にめぐり合わせたのである。これは鐵道建設と西部の終りであり、平原と山脈を鐵のくびきの下においた人々も年老いた。或者は貧しく、成功した者さえ休息を求めてしばしの死からの猶豫を求めている。その時代はすでに過ぎ去つて元へ戻すことは出來ないのだ。(13)」

『吾等の者の一人』のクロードや『ルーシイ・ゲイハート』のヘロイン、ルーシイはかくして「西部の終末」以後のインテリでありアレグザンドラやシアやアントニアとの性格の上での對照もこの意味に於て理解すべきであろう。

(四)

『轉落の貴婦人』の悲劇の梗概とその背景となつていた時代的特質を語れば以上の如くであるが、最後にこの物語を通して感じられる女史の技法と言つもたのを二・三考えてみたい。

女史の創作態度には形式を重視するよき意味での藝術至上主義的傾向が多分にうかゞはれる。したがつて創作にあたつても、プロットとスタイルに並々ならぬ苦心がはらわれていることがわかる。物語全體を幾つかの大まかな項目に分割し、更にこれをいくつかの小さなエピソードに細分しこれらを層層的に積重ねてゆこうとするのは、その回想的手法とともに女史の常套的手法と言えるだろう。『轉落の貴婦人』もこの例に洩れないのであるが、この物語に限つて全體が僅か二部に分たれただけであることは一應注目されねばならない。と言うのは女史の細心の注意をもつても物語の層層的構成法は、ともすれば個々のエピソードに力點が移りすぎて作品全體の緊縮感を弱める結果になろうとするからである。『吾等の者の一人』や『私のアントニア』には殊にこの傾向が著しいように思われる。その意味でこの『轉落の貴婦』人はその近代的な内容と共に、約十年にわたろうとするその物語を百七十四ページの中に凝

縮してしかもスピーディに物語を進めている點で女史の作品中で一きわ生彩をはなつていると思う。しかも物語の冒頭と、最後の章に於て夫々プロローグ、エピローグとも言うべき短い章をもうけているのは、これだけの分量の物語を盛るにはやゝ困難かと思われる時間の經過を有効に現わしていると言うことが出來よう。

女史のスタイルもまた獨自な美をもつているが、我々はこの美をスウィートな、デリキットなものと考えていゝだろう。たとえば女史の場合自然描寫にしても單なる自然の描寫たるにとゞまらず、それが作品の中の人物の心理の陰影と調和して一種の哀愁的雰圍氣をかもし出す點で獨自なものをもつている。月光のもとに靜かに横たはる西部開拓地の夜景、遠い過去への感傷的な追想、或は又遙かなる人への思慕等を女史は好んで描こうとするのであるが、『轉落の貴婦人』の如き作品に於ては内容が内容だけにそれらは作品に一層の生彩を加えていると言えよう。

けれども我々はこのような女史の技法のすぐれた面を把握すると共に、この女史の纖細なスタイルは同時に缺點となつていることをも認めねばならない。例えば『おゝ開拓者よ』や『私のアントニア』の場合、女史のこの纖細なスタイルは必ずしも適切ではなかつたように思われるからである。默々として荒い勞働に從事する農民の生活を描くのには女史のようなきれいな文章よりももつとごつ〳〵した鈍重な調子がにつかわしくないだろうか。例えばシオドア・ドライザーが西部農民の生活を描いたならば、素朴で忍耐强い農民の生活が一そう適切に表現されたのではないかと思われる。と同時にこの作品の中に出て來るニール青年の場合をみてもわかるように女史の描く男性は何か弱々しく中性的な儚ないもろさをもつた青年たちばかりである。これは作品全體の思想性の稀薄さと共に一人の作家としての女史の藝術に超え難い限界を與えるものであらう。

しかし他の多くの現代アメリカ作家たちが、自己の藝術の中に深刻な人生社會の問題ととりくんだのに對し、あくまで自らの藝術の端正ならんことを欲した女史にとつては所詮やむをえないことであろう。

註(1) キャザーにはこの作品に先立つて *The Troll Garden* (1905), *Alexander's Bridge* (1910) があるが、まだ女史の本

領を獲得した作品とは言えないであろう。

(2) *A Lost Lady*, Alfred A. Knoph, p. 46.

(3) Ibid., pp. 36-66.

(4) Ibid., pp. 66-67.

(5) Ibid., p. 100.

(6) Ibid., p. 105.

(7) Ibid., p. 106.

(8) Ibid., pp. 168-169.

(9) *My Ántonia*, Houghton Mifflin, pp. 225-232.

(10) *A Lost Lady*, p. 10.

(11) Ibid., pp. 54-55.

(12) 本稿中の註7に同じ。

(13) Ibid., pp. 168-169.